

朝飯を食い終わり 2 階のアトリエに上がってきた。文章のこのあとを続けようとしたが、朝飯の話がしたい、仕様もないことですが、聞いてください。最近目覚めるのは朝の 7 時前後、山登りがはいると、5 時とか 6 時になる。夜の 12 時過ぎまで起きていると朝は 8 時ころになる。目覚まし時計もなくおおよそこれぐらいの時間には目覚めてしまう。

布団をたたみそのままキッチンに行く。トースターでパンを焼く。パンはスーパーで売っているもの、安価なものでじゅうぶんに旨い。＜日本では「十分」が使われており、「充足」や「充実」の意味から「充分」も表記されるようになった。公文書では「十分」が、日本国憲法では「充分」が使用されている。＞それをきつね色に焼くのが好きだ。きつね色というのは母親がいていた言葉、その言葉が染みつきいまだに使っているが、よその家庭ではなんというのか知らないが、パンの焼き方に注文つける人はいないかもしれない。先日、我が家に泊まったひげさんが、「こんなこげたのは いやだよ」と言っていたが、「軽く焼いて きつく焼いて」ぐらいで、「こがして」とは言わないだろうね。2 年 3 年ぐらい前まで、それこそ子供時代から食パンをトーストしてマーガリンをつけていた。「マーガリンは 身体に 悪い」「あれは 化学製品 あれはいけない」と恭子さんがいう。「いまさら 生涯にわたって 食ってきて・・・」ときょとんとはしたが、それ以来ぷつぷりマーガリンをつけるのをやめている。「なら どうしたらいい」パンの食べ方に悩んでしまった、しばらくは色々試した末に、こんがり焼いた食パン 2 枚の間に、まず漬物を並べ次に果物を並べる、これが旨い。漬物はぬかずけ、塩づけのあと甘酢、どちらもいいが、甘酢の方が多いかな。材料はキャベツに大根、夏になるとキュウリにナス、その上にリンゴかバナナ、レタスカトマト、思い出すだけでもよだれが出るという程に旨い。「なにい つけもの そんなものが旨いか」とみなさんあきれ顔でおっしゃるが、「そういやあ ピクルスもありだねえ」と納得もされる。飲み物は紅茶がいい、紅茶をたくさん作って牛乳を入れ、大きいマグカップに 2 杯ほどいただく、旨いねえ。とまあこんなぐあいの朝食を毎朝楽しんでいるのです。

さて、脱線した話を戻して、パソコンのスイッチを入れる。またまた脱線だが、パソコンの話、WINDOWS10 に変更したことを後悔している。WINDOWS7 のままでよかった、「今 変えたら 無料ですよ」という甘い言葉に踊らされ、変えてしまったが、いくつかのものが使えなくなってしまった、新しく色々な機能が付き便利になったというには、不便が目立つ。横を見れば同じようにパソコンを使っている仲間がいるという環境の人たちなら、お互い聞きあい、調べあい、ことなくシステムを動かしていくのだろうけれど、新しい言葉、新しいシステム、「なにが なんやら わからない」というオレは、新しいシステムについていけない、WINDOWS10 に変更してしまい間違っただけで済んだと今は後悔している。思い起こせば 20 年前、初めてパソコンと出会った当時、パソコンが動かなくなったことが多かった。「フリーズ」という言葉を覚えたが、何かの作業をしている最中に画面が突然止まるということが度々あった。その都度「どうすれば作動するか 修復するか」と悩みつつ格闘していた。それこそ横にパソコンに精通した仲間がいれば、難なく解決したことなのかもしれないが、1 時間、2 時間、半日、と時間を無駄にしていたかもしれない。それに比べ最近のパソコンは、再三ストップはしない、機嫌よく動いてくれる、たまにフリーズに近い状態になっても、再起動すれば元のように動き出す。こんな機嫌のいいパソコンと日々付き合っていると、ぐずったときの対処方法をすっかり忘れてる自身に気づく。車の場合、乗る前にボンネットを開け点検する、これは自動車教習所でそう教わったように記憶するが、自身で車のボンネットを開けるなんてことは年に一度もなくなった。パソコンも、組み立てや、メモリの増設など自分でやっていたが、今は何もかもが「わからない」の状態である。

さて、また脱線した話を戻し、パソコンを見ると、まもなく降ってくるというネットからの情報、降水確率の数字、今が 30%、昼ごろが 60%、午後からは 70%、と予想されている。「雨は久しぶりだねえ」と思いながら、雨が来ない今のうちに安威川に行こう、ということで、河川敷にやってきた。空気が冷たい、灰色の空、速足で歩く、体がぬくもってくる。2 月 3 月と過ぎていく、まだ寒いと言いつつも気温は 10 度を超えている、5 度ぐらいの時も同じように寒いと言っていた、人の感覚はいい加減なものだとつくづく思う。河原の草が伸びてきた、なんだか小粒の小さい花が一つ二つそこにある。1 月 2 月は木の枝が天に向かっていた、幹も枝もモノトーンだが、その先だけがやや暖色系のふくらみ、それが次の時にはやや緑系、そして今でははっきりと小粒の緑がぎっしり並んでいる。今は花見の季節らしいが、例年展覧会の忙しさで、春の息吹を見逃してしまう。

愛媛県伊予市三秋にある共栄木材での展覧会がまもなくという今。

来廊御礼 岡村隆久展 共栄木材：三秋ホール 5月13日～21日

かつて、紅顔の美少年だった私も、七十歳になりました。三秋ホールのオーナー：西下健治さんと知りあったのは美少年から二十年ほど経ったころ、友人の友人の・・・という方から紹介されました。初めて会ったその時から話がはずみ、「四国へ 遊びに 来ない」「双海町の 海に沈む 夕日が すばらしい」と誘われ早速おじゃましました。緑の多い里、ガラス越しに見える海、燃えるように沈んでいく太陽、すごい景色でした。

今年の正月、西下さんが大阪に来られてお会いし、「展覧会をしませんか」と言っていただきました。ふたつ返事で、「展覧会をしたい」と喜んで答えました。余談になりますが、西下さんとお会いするのは三十年ぶりぐらい、その間年賀状やメールで話がはずんでいたもので、年月の隔たりは感じませんでした。私は好々爺に、西下さんは、体形こそ変わらないが、堂々とした実業家になっておられました。

二月に会場の下見のため、伊予市三秋に来ました。「木造の いい建物」とおっしゃるように、ガラスや金属やコンクリートをはさんで、横に縦に斜めに、木肌が迫ってきました。丘の斜面にある建物、丘の斜面に立つ樹、まもなく暖かくなり、展覧会開催の五月頃には、草が、若葉が、花が、山の中をにぎわせているだろうと思わせる景観、「すばらしい」と思わずつぶやきました。

私の作品発表は、毎年春に大阪で展覧会をやっています、個展です。そのあいまにも時々臨時の個展をはさんでいます。今年は3月に大阪の展覧会をかわきりに、5月はここでの展覧会、11月に大阪で、3回の展覧会があります。今回の展覧会は、ここ5年ぐらいに描いた、「お気に入り」を飾ります。

私の絵は、抽象画ですが、具体的な形を抽象化、形象化したものです。「人が地面をけて走っている」「自転車に乗った人が風を切っている」「楽器を演奏している」というような具体的なイメージが基にあります。これらの基のイメージは、若いころに何度もデッサン・スケッチをしました。徐々にそういう形が崩れ、それこそ基の形も姿もなくなってしまっていますが、描いている本人にとっては、基のイメージが頭の中に心の中に厳然と残っています、残っていないとだめなのです。「君い どこで描いてもいいような景色のために わざわざ 北海道まで行かなくても」と口の悪い友人が言いますが、「北海道に行って 見て 感じて 想わないと 絵が描けないんだよ」と言っています。

材木の、建築の専門家が多くおられるこの会場、聞いてください。日本人は千年、二千年、木で造った家に住んできた、木と土で造られた家に住んできた。先日我が家を改装する際、木の材料見本をたくさん見せてもらったが、種類が多すぎ自身で選べないので専門家にお任せした。ひとつ気になったのが白木の経年変化のこと。新しい家は、その家に入ると、木のいきづかい、木の香り、そのぬくもりがホンワリ漂ってくる、この感覚は心地いい。5年10年と年月を経ると白に近かった木の色が徐々にあめ色に変わっていく。50年もすれば褐色に変化していく。「飴色がいいのだ褐色がいいのだ」とおっしゃる方もおられますが、我が家の改装時、「板に色を塗らせてくれ」と建築士に頼み「構造合板に 塗ってもらいましょう」という返事が返ってきた。板を床に並べ、油絵の具を塗り、布でふき取った。布でふく作業は材料の段階でしかできず、木が組みあがってしまうときれいにふけないという難点がある。「白木の 油絵の具 雑巾 仕上げ」とでも洒落てみました。板はかすかにマットに色がつき、10年近く経った今も建築当時の色あいを保っています。油絵の具の、植物性油脂の香りが心地いい、木の肌が浮いて見えるのがいい、木の家はいいねえ。

長谷川宏著<日本精神史-「古事記」その文学性と思想性>「天皇家の話はねえ・・・」「漢字の固有名詞が 人の名前が読めなくて・・・」何度か古事記のページをめくってみた結果の感想だったが、この先生の短いエッセイの中に書いてある面白いことを紹介するとともに、もう一度古事記を読み直してみようと思う。

古事記が完成したのは 712 年、律令国家の体制が整った時期のことだ。大化の改新を境に氏姓制度を脱して中央集権国家への道を歩み始めた大和政権は、律令の制定と都城の造営を大きな柱として新体制の建設へと向かった。律令は、近江令、飛鳥浄御原令、大宝律令、養老律令、と四次にわたる制定改定がなされた。都城は、持統天皇のもとの、日本最高の本格的な、藤原京が建設され、さらに平城京への建設と引き継がれた。律令も都城も中国を模範と仰ぐもので、隋・唐に倣うのが中央政権のめざすところだった。法と官僚機構の整備、宮都・宮廷の造営と並んで、天皇の国家支配を根拠づけ正当化する書物の作成が中央政権の大きな課題となった。「古事記」と「日本書紀」の作成である。

天照大御神と弟、須佐之男命（すさのうのみこと）の話：「すさのう」は海原を治めよと命じられるが、「海原を治めるのはいやだ 亡き母の国に行きたい」と駄々をこね、青々とした山が枯れるほどに大泣きする。そのため悪神たちが騒ぎ、災いが起こった。「すさのう」追放された。「すさのう」は途中で、「あまてらす」に会うために高天原に昇る。乱暴者の「すさのう」は、田の畔を壊し、溝を埋め、糞をまき散らし、馬を逆剥ぎにして投げ入れる。「あまてらす」から高天原を追われ、出雲国の斐伊川を上っていくと、老夫婦と娘が泣いている。聞くと、「八俣の大蛇が毎年やってくる すでに八人の娘が人身御供になっている 今年はわたしだ」と言って泣く。「すさのう」は大蛇を退治する決意をする。老夫婦に強い酒の入った器を八個用意させ、大蛇が酒を飲んで寝込んだ隙をうかがい切りかかり退治した。そのあとめでたく娘と結婚した。

「すさのう」の乱暴に閉口した「あまてらす」は天の岩屋に隠れる。神々が集まって「あまてらす」を岩屋から引き出す手立てを協議し道具を準備する。「あめのうずめ」が岩屋の前で桶を踏み鳴らし、胸の乳をかき出し、裳の紐を陰部にまで垂らし、女神の裸踊りである。高天原は大騒動となり、神々がみな大笑いした。「あまてらす」が岩屋の戸を少し開け、「私がないので 天上界は真っ暗なはず どうして 踊り 笑うのか」「あなたより 貴い神が あらわれたのよ」そう言って「あまてらす」に鏡を見せる。「???」と「あまてらす」が岩屋から出てくると同時に後ろから岩谷の戸を閉じた。貴い神とは鏡に映った「あまてらす」だった。

この楽しい物語は文字で書かれる以前に人前で演じられていた演劇として、あるいは、聴衆に語りかける口承の話として伝承されてきたものであろう。神がかりの状態、あられもない恰好で演戯に及ぶ「あめのうずめ」を見て神々が笑う。神々の笑いは演じ手、語り手の笑いでもあるし、観客や聞き手の笑いともなる。善しにも悪しにも通じる特別の威力を持つ神々は、崇め、敬い、ほめたたえるべき存在であるとともに、恐れ、畏（かしこ）むべき存在だ。そういう神々との関係に笑いを吹きこみ、笑いの中で神々と、あるいは精霊と交流する、古代人の精神の大らかさ示す笑いであり、ふるまいだ。

精神の大らかさを表現する笑いの場面として、伊耶那岐（いざなぎ）伊耶那美（いざなみ）の神話も読むことができないだろうか。「成り成りて成り合わざる処一処あり」「吾が身は 成り成りて成り余れる処一処あり」「吾が身の 成り成りて成り余れる処をもちて 汝が身の成り合わざる処を刺し塞ぎて 国土を生み成さむとおもふ 生むこといかに」この表現が男女の性の関係の官能性にそぐわず、そのちぐはぐさに笑いを誘う。口語で語られるのを聞いたなら、その場で笑いがはじけるのが聞き手の自然な反応ではないだろうか。国生みという国家の根幹をなす厳粛な行為のうち、笑いが平然と紛れ込む。古代神話の大らかさであり、おもしろさだ。古代人の世界は、日々の暮らしの場においても、また内外の敵と戦いつつ共同体の秩序を維持していく政治の場においても、決しておおらかさやおもしろさを満喫できるものではなかつただろう。だが、語りの場、演戯の場ではおおらかさやおもしろさが出たのであろう。

「いざなき」が妻の「いざなみ」に「お前の体はどう出来上がっているのか」と尋ねると、「いざなみ」は「出来上がって足りないところが一か所あります」と答えた。そこで「いざなき」は、「わたしの体は出来上がって余ったところが一か所ある だから わたしの余ったところでもって お前の 体の足りないところをふさいで国を生もうと思う どうだろうか」といった。「いざなみ」が、「それでいいでしょう」と答えたので、「いざなき」は、「じゃ 二人でこの天の御柱のまわりを回って出会い 交わろう」といった。そう約束して、早速柱を回り、「いざなみ」は「ほんにまあ よい男」といい、「いざなき」が「ほんにまあ よい女よ」といった。婚姻の場で交わって子を生んだ。その子がぐにゃぐにゃの水蛭子（ひるこ）だったので葦船に入れて流し捨てた。次に淡島を生んだがこの子も数に入れなかった。

長谷川宏先生解説によると、古事記は「上巻」「中巻」「下巻」の三つから成り立っているという。

「上巻」は神代の物語だ。まず高天原に天之御中主神「あめのみなかめしのかみ」以下の神々があらわれる。最後に現れた「いざなき」「いざなみ」の二神が地上に降りて結婚し、地上の国々や島々を、また海の神、風の神、木の神その他の神々を生む。が、火の神を生んだ時に陰部を焼かれた「いざなみ」は死んで黄泉の国へと赴く。「いざなき」は後を追って黄泉の国へと行くが、「いざなみ」の醜悪な姿を見て逃げかえり、みそぎをして神々を生成する。生成の最後に、左目から天照大御神、右目から月読命（つくよみのみこと）、鼻から須佐之男がうまれそれぞれに高天原、夜の食国（おすくに）、海原の統治を委ねられる。多々の変遷を経て高天原の神々から地上の天皇へと血統がつながる。

「中巻」は神武天皇から応神天皇に至る十五代の天皇の物語だ。天皇が国土を平定し、天皇支配の秩序を作っていく過程が物語の主軸をなす。特に英雄的な活躍ぶりが活写されるのが、神武天皇と、倭建命（やまとたける）のふたりだ。神武は九州の日向から海路をとって瀬戸内海から浪速に向かう。浪速で戦い敗れ、海路紀伊半島を南下、熊野から八咫鳥に先導され大和でいくつもの戦いに勝利する。橿原の宮で即位して天皇となる。「やまとたける」は大和政権に帰順しない各地の反逆者たちを打倒すべく、西へ東へ討伐の旅に出る物語だ。熊曾建（くまそたける）兄弟とは、宴席で女装し不意打ちで二人を刺し殺す。出雲建とは、事前に相手の真刀を木刀とすり替え、あっさり打ち殺してしまう。東征では、尾張、駿河、相模と敵を倒し、甲斐、信濃とまわった。その後美濃、伊勢、三重とさまよい病死する。

「下巻」は王位の継承をめぐる争いが主題の物語となる。骨肉の争い、殺害、妻や娘の略奪、にぎやかである。

仁徳天皇の話。山に登って国見をしたら家々から炊煙が上がっていない。人民の貧困を見てとり、3年間、税と夫役を免除した。再び国見をすると炊煙が盛んに上がっているので、税と夫役を再開した。歯の浮くような話、天皇を儒教的賢帝に仕立て上げようというつまらない話がすぐに終わり、皇后の嫉妬に悩む色好みの仁徳の話があとに続く。古事記が天皇支配の正当化と天皇賛美こそが撰録のねらいのはずだが・・・皇后の執拗な嫉妬、その嫉妬をかいくぐって思いを遂げようとする仁徳の色好み、人間味豊かで興味深い話がつづられている。

允恭（いんぎょう）天皇が死んで軽太子（かるのおおみこ）が王位を継承する予定だったが、同母妹（同母兄弟）の軽太郎女（かるのおおいらつめ）と近親相姦的密通のあいだがらになる。（当時、異母兄弟なら、婚姻は認められていたが、母系社会の関係で、同母兄弟の婚姻は認められていなかった。）

道に外れた二人の行動を、古事記は一組の男女の恋愛としては忌まわしいものと見ていないし、忌まわしいものと表現していない。二人の恋心は歌によって表現されている。下記は初めて共寝をした二人の歌。

◎あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走（わし）せ 下訪ひに 我が訪ふ妹を 下泣きに 我が泣く妻を

今夜こそは 安く肌触れ <人目を忍んで訪ねていたが、今宵こそ心やすらかにその肌に触れているのだ>

◎笹葉に 打つや霰（あられ）の たしだしに 率寝てむ後は 人は離（か）ゆとも 愛しと さ寝しさ寝てば

狩菰の 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば <私たちがたしかに共寝をした、そのあとはどうなっても・・・>

先日来、面白い出来事が続いた、「まさか オレが・・・」とあきれ「うれし はずかし」とにんまり笑い、人並みにそうっていくのかと遠観してもらえないできごとである。

「健康保険課の山Xですが 去年の八月に 書類を送らせてもらいましたが・・・」「年度末に期限が切れておりますので・・・」「本日お支払いをしたいのですが・・・」「後ほど銀行から電話してもらいますので・・・」今から考えれば、非通知の電話番号、過払い金の返還、冷静に考えれば「おかしい」と気づくはずなのに、夢中になって聞いていた、彼の話に引き込まれた、詐欺師というのはすごい人だ、親切な人だ、丁寧な人だ、と苦笑。「三X銀行 総合窓口のXXともうします・・・」「当行では お手続きができませんので XXにございます XX銀行 ATMコーナーまで行ってほしいのです・・・」持ちなれない携帯電話を借り、じゃまくさいが行かねばと着替えた。絵の具を用意したばかりなので、画面に絵の具を乗せた、帰って絵を見れば、うまく絵の具がおさまっている、うまくいっている。無心に騙されている高揚感が、画面にも出たのか、人に動かされて行かなければならないという使命感、普段の日々は、社会と隔絶とまではいわないが、人とあまり話す機会がない、頼まれる要事も、人のためにしなければいけない作業もさほどない、という状態が続く中、その久方ぶりの高揚感が、絵を描く姿勢にも表れたのかなとこれまた苦笑。

とにかく行って見ようと自転車で指定の場所に地下づく ATM の大きな看板が見える、自転車を手前の駐輪場に止め近づく、紺色の制服を着た警察官が3人立っている、「何をしているんだろう」「交通違反の取り締まりかな」「まさかまた オレの職務質問でもあるまい」と中に入ろうとすると、大きい方の若い一人が「何しに来られました・・・」「電話で指示され ATMへ来たのでは・・・」「??・・・」「実は 振り込み詐欺が ここで・・・」この時点で目が覚めた。「まさか オレが・・・」と苦笑してしまった、無心に誘導されていた、なんということだ。非通知電話、役所からの話、お金の返還、銀行ATM、振り込み詐欺のアイテムがずらり並んでいる、騙されるということはこういうことなのだとは笑っているしかなかった。職質常連者としては、またまた警官氏と親しく話し合った、感謝。

もう一つの出来事は、展覧会が終わり、お買い上げの襦袢君を届けに行く道中、カメラと三脚、襦袢君とお土産、それらを大きなカバンに入れ住之江区のポートライナーに乗っていた。吊革につかまり外の景色を見ていた、新しい場所での、乗りなれない電車やバスは不安である。南港にはいつも車である、昔、電車で来たときは、本町から直接に天保山を越え南港まではつながっていなかったのでは、地下鉄がトンネルの中を通りつながったのか、不思議だ、なんて思いながら不安げに外の景色を見ていた。「あのう 変わりますでしょうか・・・」「いえ 大丈夫です」なんと 若い娘、華奢な女性が席を変わりますかという。いえ、と返事をしながら、その人に悪いことをした思いと、オレもそういう人に見られているのかという思いが駆け巡った。彼女はわが娘と同年配ぐらいかもしれない、勇気を出して言ってくれたのに断った自分のいやという言葉が悔やまれる、オレは席を譲られる老人になってしまったのかと俄然とする。先日、同窓の小林先生が同じように、席を変わってあげましょうかと声をかけられ、しよげていた。声をかけられないために、帽子をかぶることにした、と言っていたが、どうも帽子ぐらいでは衰えは隠せない、オレもその時には帽子をかぶっていたから。娘に話すと「そのこ よくまあ 怖そうなおじさんに こえ かけてくれたね」だとさ。

老人事情とでも表現しようか、まさかオレが、人ごとのように思っていたことが続けてふたつも起こった。まわりを見れば、よたよた歩きの老人、もごもごしゃべりの老人、口だけ達者、大きな声で世の中を説く、人の言うことは聞けない、そんな老人がまわりに溢れている。転倒する、なにを言っているのかわからない、説明もまともにできない、まわりは老人だらけ、オレももちろんその一人なのだと自覚しなければ。オレにも、次に何が起こるかわからない。老人特有の行動、高速道路の逆走、自転車事故、家庭内転倒、約束、契約が守れない、理解できない、お釣りがわからない・・・。病院のベッドに横たわりたくないが、これも自分の意志でままならない事情がやってくると思うといやだねえ。「六十、七十歳 鼻たれ小僧 まだまだじゃわい」と豪語したいねえ。

またまた本居宣長の「神の定義」が出てきた。高貴なもの、善なるものだけを神とは呼ばず、いやしいもの、悪いもの、あやしいものも、神とするところにある。「悪きもの奇（あや）しきものなども、世にすぐれて可畏（かしこ）きをば、神と云うなり」

◎本居宣長の神：天皇、雷、天狗、木霊（こだま）、狐、妖怪、疫病や害虫や悪意をもった風、他者を侵害する邪悪な能力が可畏（かしこ）きもの。八岐大蛇を「可畏き神」、狼を「貴（かしこ）き神」、虎を「威（かしこ）き神」。

◎柳田国男：「…人間の霊魂以外の種々なる事物の霊魂、またその遊離霊はモノである。モノは言わばアニミスティックな霊質に近い」「妖怪の多くは信仰が失われ零落した神々の姿である」

◎日本書紀：螢火の光（かがや）く神、蠅声（さばえな）す邪（あ）しき神：勝手に輝く神、ブンブンうるさいやから。

◎出雲国造神賀詞（いずものくにものみやつこかんよごと）：豊葦原の水穂の国は、昼は五月蠅（さばえ）なす水沸き。夜は火瓮（ほべ）なす光（かがやく）神あり・・・あしき神、荒ぶる神が横行しては、炎のように燃え上がる。異形のもが登場し跳梁跋扈する、古代日本では神とも鬼（モノ）とも呼んでいた。

馬場あき子著<鬼の研究>先生、鬼について。1) 日本民俗学上の鬼、祝福に来る祖霊や地霊。2) 山伏系の鬼、道教や仏教を取り入れて修行道を創生した人たち。3) 神道、修験、仏教の夜叉、羅刹、地獄卒、牛頭鬼（ごずき）、馬頭鬼（めずき）、生活哲学系に生きた鬼。4) 人畜系、放逐者、賤民、盗賊。5) 復讐の鬼、怨念、憤怒、雪辱、そのエネルギーをもとにしている。

今の世の中、ほとんどの人が自分のことを、文明人であり現代人だと思っている、古代人じゃあるまいし、自分のまわりを飛び回る、闇の世界の幾多の神々の跳梁跋扈などつゆほども考えてはいまい。下記を調べてみた。

◎夜叉：インドの神話や仏教（毘沙門天の眷属の鬼神）に登場する。男女がいる。残虐で暴力的な悪鬼の反面、法や宝物を守護し人の恩恵を与える面もある。「夜叉のような奴め」とののしる言葉ばかりではないようだ。

◎牛頭鬼・馬頭鬼（ごずき・めずき）：仏教で、地獄にいる亡者どもを責め苛む獄卒のこと、ヒトの身体に牛や馬の顔がついている。ふんどし一丁の大男、顔が牛や馬、彼らが鞭や棒をもって、囚われ人を追い立てるさまはすさまじい。

◎小面と般若：<中世破滅型の典型としての般若>能の般若（鬼となった女性）の面は、すべてなにごとかによって女性の変貌をとげた面とされ、きわめてドラマティックな場に使用されている。そして、優雅・婉麗（えんれい）な小面（こおもて；女性）とは全く対極をなす面として知られているが、面を使用される場とその効果演技性の方面から考えると、般若の面の表現しうる内面とは、小面に比べていちじるしく非演技的であることに気づく。急迫したドラマティックな場の高揚した雰囲気は般若の登場につきものであるが、まるでその場の雰囲気をそのまま象徴したように般若の面はシテの内面をさらけだし、これ以上どうしようもない哀しみや怒りを発散している。

先生は、日本の伝統という点で、人間の表情は、日本人は極端に陰（隠）蔽的などころがあるが、般若の面は、反伝統的というか、大胆に極限状態におかれた心理を表現している。その点、小面のほほえみの表情、時代的悲哀、哀憐、喜悅、幸福感などを伝えてなお艶である。ほとんどが悲哀をテーマとする能舞台上、女面にほほえみを与えたことは絶賛にあたいする工夫だとおっしゃる。般若が小面の対極の面だというなら、その姿かたちは表現が過度すぎるとオレも思う。今知って、すぐそういうことを言うのもいささか軽率かもしれませんが・・・。

般若が、小面が、女の顔とは知らなかった。奈良に伝わる舞楽の面、縄文人が作った土偶の顔、日本だけでも古来からたくさん顔が造られてきた。もはや過去のものだけれど、人が造ったもの、人も生き物だということ、人の生き方も、食い方も、こし方も、考え方も、感情も、何万年経っても同じだと気づかされる。生意気ですが、四角い世界、自分のキャンパスの画面を見てみて、これがオレの神の鬼の世界かもしれないとふと思いました。

車を降りて歩き出した。今日の山は「青葉山」別名「若狭富士」というそうだ、山の形が富士山に似ているらしい、大昔に火山噴火でできたらしい。季節はまもなく五月、暑くもなく、寒くもなく、真っ青ではないが陽が照り晴れている、若葉が萌えたち、同行6名の話も弾む、平均年齢は70歳ぐらいかな。高さ600Mのハイキングの山、穏やかな道を登っていく、左右に竹と杉が植わっている、ともに手入れがされていない。太い竹が生えそろう、倒れ、枯れた竹が地面に散らばっている。わが住まいの近所の竹林を見慣れているものにとっては、いささか汚い竹林である、それと同様、杉も太いもの細いもの、地面も枯れ枝やら倒木やら、「ほったらかし」状態である。

初めての山なのでサイトで検索、茨木を7時に出発、京都縦貫道から、舞鶴東ICで降り、青葉山ハーバービレッジ付近の駐車スペースに車を止めた。2時間、高速料金3500円。

所々に岩がある、ポコポコした大きな岩は、溶岩だとわかるような岩である。大昔に大規模な噴火があったが、今残っているのは、ほんの一部だそうだ。<山には東西二峰あり 東に祭る神は 若狭彦神・若狭姫神 西に祭る神は 笠津彦神・笠津姫神 是れ若狭国と丹波国の分境にて 同じく松柏多し>と風土記に書かれている。登ると下の方に村が見える、海が見える、海の形、陸の形が複雑に入り組んだ地形はなんとも美しい、これで、高浜原子力発電所がなければ・・・と悔やまれる。

「花が きれいな山だと 聞いたよ」歩き始めて、シャガが咲き誇っている。緑の葉っぱの中に白い花、黄色や紫色がちりばめられ、そっと咲いているのに可憐で華やかである。次の花がイカリソウ。タブレットを示して「白も紫もあるよ」というイカリソウ、先ほどから、白い花、ピンクの花、紫の花と別々に見ていたが、どうもこれらは同じ花のようである。形が船の碇のようなツノがあちこちに伸び不思議な美しさ、華やかさのある小さい花だ。名前の知らない花が2.3あったが、山は「おはなばたけ」の季節である。

青葉山山頂で、「食事にしよう」とシートを広げ、湯を沸かした。カップヌードルに順次湯を入れ、たくさんのおにぎり、オレンジとキーウイ、三種のまんじゅう、満腹になるまで食べ、コーヒーをいれた。食後のここからは山の様子が一変、鎖、ロープ、梯子、が続く。昔からの修験道の山らしく、大峰山を思わせる山道、平衡感覚がなくなってきた、バランスが悪くなってきた、これで掴まるところがなければ、帰りたくなるかもしれない。岩がでこぼこ、降りては登り、登っては降りる、下の海岸風景がきれいに見える、岩のえぐれたところがある、4.5人なら籠れそうな洞窟がある、なかなか楽しそうなところ、ちょっと降りて探検してみたいところだけど、下までころげ落ちたら大変だと慎重に歩いた。

ハイキングのつもりの山だったが、頂上の二峰の間、「おっほっほ こわいねえ」なんてふざけながら大いに楽しんだ。オレは怖がりの高所恐怖症だけれど、掴まるところ、しっかりした枝や、鎖や、ロープがあれば怖くはないタイプ、腕で、足で、三点確保で、歩けばなんと、楽しく歩ける。膝もほとんどいい状態、この山ぐらいなら以前のように歩けた。あとはひざの完治と元の体力が早く戻るよう努めなければ、まだまだ山を楽しみたいものですねえ。

だんだん麓の雰囲気、大きな木が朽ちている、いやすこし若葉がのぞいているが、太い幹は苔むし、えぐれ、倒れかかっている。妖怪でも、幽霊でも棲んでいそうな木をやりすごす。石造りの鳥居までもが崩れている、丸柱が二本立っているだけ、弧形の石が下に散乱している。この鳥居は、山をご神体とする鳥居だったのでは。夜になると獣君たちが闊歩しそうな雰囲気だ。そんな不思議なだだっぴろい空間を抜け、少し下ると松尾寺に出た。西国三十三寺のひとつだそうだ。山には山桜がポツリポツリと咲いていた、お寺には八重桜が咲いている。「車まで 歩いてくるので コーヒーでも飲んで 待ってて」とお言葉に甘えた。久しぶりにいい山でした、楽しみました。